いきいきまえばし人

映画監督
飯塚 俊男さん・71歳
平和町二丁目

記憶を記録にして遺す

前橋シネマハウスで昨年8月から10月まで公開された映画「陸軍前橋飛行場～私たちの村も戦場だった」。この監督を務めた飯塚さん。

「制作のきっかけは友人に紹介された本で、鈴木越夫さんの『陸軍前橋飛行場と戦時下に生きた青少年の体験記』。戦争体験を多くの人に見てもらう大切さを感じ、友人から地元で映画を作ってほしいと言われていたこともあって、映像化したい思いを鈴木さんに伝えて実現しました」

映画の制作で避けて通れない資金面の課題は、制作協力委員会に約50人集まった仲間のおかげでクリアできた。

「当初の想定よりも多く資金が集まったことで、終戦時米軍に接収された映像のデータをワシントンで入手することができました。当時を知る人たちの生の声と、当時の戦火の映像が、画面に息吹を与えてくれました」

映画は好評を博し、2，000人を超える観客が来場。全国のまちの映画館でも上映され、今後は県内各地で上映を予定している。

「先人の記憶を記録にする。この役割を担えて光栄です」と飯塚さん。「戦争は二度と起こしてはならない」というメッセージを、この映画が後世に語り継いでいくだろう。

萩原朔美 河畔奇譚

vol.12

松平さんのトークで笑いに包まれる会場

萩原朔美文学館長が各界の著名人と対談。今回は元NHKアナウンサーの松平定知さんの朗読&トーク「芥川を読む」（一部）をお届けします。

●朗読するときの姿勢

松平　泣きながら、または絶叫しながら読む人がいますが、これで良いですねと一つ一つ作者に確かめるようにやっていくのが朗読の基本だと僕は思っています。

萩原　とても聴きやすい朗読でしたね。

松平　僕の声は良いか悪いかで言ったら悪い方ですが、こういう声で良かったと思っています。男らしい野太い声が必ずしもいいわけではない。例えば『吾輩は猫である』は野太い声で読む作品ではないのです。夏目漱石が世の中の森羅万象を猫に言わせる、いわばしゃれですから。一番偉いのは原作者。そのことを常に思っていないといけませんね。

●憧れの萩原朔美館長

松平　朔美さんと共通の友達であるアートディレクターの榎本了壱さんは言葉の達人。そんな榎本さんと雑誌『ビックリハウス』を作られた朔美さんは憧れの人なのです。榎本さんから朔美さんのお話もずっと聞いていましたよ。

●芥川と朔太郎に感じるもの

萩原　松平さんにとって芥川はどんな作家ですか。

松平　全部大事に読むと特に感じますが、結末を計算して一つ一つの言葉を選択してある。すごいなと思いますね。

萩原　朔太郎はどうですか。

松平　『月に吠える』は5回ほど読みました。他にはない感性を感じる詩人ですね。（了）

圓前橋文学館
☎027-235-8011

クローズアップ CLOSE UP

全国初の試験を本市で

2月15日、次世代の通信規格「5G」を活用した実証試験を実施。救急車とドクターカーが交通事故の負傷者を病院に搬送する流れを検証しました。市役所内では、リアルタイムの鮮明な映像を見て医師が治療方法を指示。救命率の向上が期待されています。

愛車で障害物を越えて

2月10日、自転車で行う障害物レースのシクロクロス大会を開催。大人から補助輪付きのライダーまで、各年代が白熱のレースを展開しました。会場では自転車競技を題材にした漫画『弱虫ペダル』の作者によるサイン会も実施。多くのファンが訪れました。

版画から思い読み解く

アーツ前橋で開催中の企画展「闇に刻む光　アジアの木版画運動 1930s-2010s」。このギャラリーツアーを2月9日に行いました。参加者は学芸員の説明を受け、作品に込められたメッセージを読み解きながら鑑賞しました。同展は3月24日㈰まで開催しています。